

受講番号 18090 学校名 窪川中学校 氏名 三上 良

**研究の背景**

研究対象(学年、クラス等) 1年1組 生徒数 30名  
 科目名 1年 単位数(授業時数) 3時間 使用教科書名 NEW CROWN 1

**クラスの様子・特徴**

一部落ち着きがない、授業規律を守れない生徒もいるが、ほとんどの生徒が授業に対して意欲的に臨んでいるクラスである。「話す」活動に興味を示す傾向が強く、積極的に取り組もうとしている。しかし、書くことに対して難色を示す生徒の割合は多い。

**問題の確定**

アンケート結果から、「話すこと、書くこと」など表現したい希望がありながら、同時にその難しさを感じている生徒が多い。

**予備調査**

**A 授業の観察**

学習集団としての基本的な部分はできている。評価のポイントを明確にして活動を行うと、多くの生徒が意欲的に英語を話そうとする。しかし書くことになると、家庭学習の習慣の有無や基礎学力の個人差から中には書くことを極端に嫌う生徒の実態をつかんだ。

**B 生徒による授業評価**

話す活動中心の授業で、「楽しい」「まあまあ楽しい」合わせて80%、「満足」「ほぼ満足」が合わせて90%である。いろいろな話を話してみたいと思っている生徒もいる。しかし、書く活動が中心の授業ではこの割合が減少し、難しく負担であると感じている。

**C 学力データ**

語句テストでは毎回80点以上とれている生徒の割合は多い方である。中間、期末テストの合計が100点以下の生徒もあり、そのほとんどが観点別の表現の能力、すなわち書くことで表現する分野について評価が低くなっている傾向がある。

**リサーチ・クエスチョン**

表現すること、特に「話すこと」に対してある程度意欲的なクラスで、コミュニケーションが成り立つような正確さを持った英文を書くことができるようになるためには、どのような指導をすればよいか。

**仮説・実践・検証**

**仮説1**

これまで以上に、単語テストなどの小テストの回数を増やしていけば、何回も繰り返して書いて覚えるという学習の習慣が身につくであろう。

**実践1**

多くの生徒が積極的に取り組んでいる音読用の語句インプットシートを活用し、語句の小テストを月3回から4回実施した。授業の中で繰り返し発音練習し、ペアを作り問題を出しあう形で発音と綴り、そして意味の定着を図ろうとした。綴りと意味の定着をより確実なものにし、学習習慣をつけるために、書く練習を家庭学習の課題とした。10問の小テストを行うことで書いて覚える習慣を身につけさせる事をねらった。

**検証1**

この実践の意図を理解し、日々繰り返し書いて覚える習慣が身についてきた生徒の中には、語彙力が確実に伸び始め、書いて表現できることが増えてきた生徒がいる。一方で、地道な努力を苦手とし、家庭学習の習慣がなかなか身につかない生徒もいる。授業の中でなんとなく覚えているため、綴りが定着しきれない。実践を進めていくほど両者の差が確実に大きくなりつつあるのが課題である。

**仮説2**

現在できているペア活動やグループ活動を発展させて、生徒同士による教え合いの場面を増やしていけば、文法力が身につく、少しまとまった量の英文を書くことができるようになるだろう。

**実践2**

ペアやグループによるインタビュー活動を意識して多く取り入れ、会話をするために必要なターゲットセンテンスや相手から聞き取ったことを書かせる場面を増やした。ワークブックを利用して書くことを通してのインプットを増やし、文法力の定着を図る授業では、課題を早く終えた生徒をミニティーチャーとし、生徒同士の教え合いの場面を作った。

**検証2**

自分の事を話したい、相手の事を知りたいという思いからそれを書いてみようとする意欲へとつながる場面が見られた。ミニティーチャーの導入は教える生徒にとって文法の更なる定着につながり、書くことに一層慣れたようである。しかし、ターゲットセンテンスやそれに関わる一文程度の量を書くことはできるようになったが、全体的にはまだまだまとまった量で内容のある英文を書くところまでは至っていない。

**仮説3**

ターゲットセンテンスや教科書を暗記できるまで音読量を増やしていけば、音と文字の関係が身につく、書くことができるようになるだろう。

**実践3**

教科書の音読を繰り返し行っていく中に、ペアでお互いの音読チェックをしあう場面を作った。練習量が不足しているところには時間を与え、音読ができていくところにはread and look upを意識させて、最終的には暗唱することを目標とさせた。個人の音読テストを数回行い、まとまった量の英文を繰り返し音読練習した。

**検証3**

練習量を増やしたことで、音から文字の関係を十分に定着できた生徒が出始めた。疑問詞のある文や3人称の英文の理解にも役立ち、正確な英文を書くことにつながっている。授業で練習したことを家庭学習の場面に利用し、書くことの定着につなげてほしいと願っているが、学習習慣が身につけていない生徒もおり、書くことに関しての学力差が広がっていることをどう克服するかが課題である。

**研究の成果**

教師自身が目標を明確にし、授業に臨む姿勢が生徒にも理解されてきている。生徒間で温度差はあるが英語を使って表現したい気持ちを持たせることができている。一問一答プラスあと一文程度の量であれば、書いて表現できる生徒は少なくはないが、そのレベルに留まってしまっている。しかし現実を見て、様々な角度からその原因を探り改善していくとする態度の大切さを教師自身が実感できたことは非常に大きい。何より、教師自身が授業を楽しみ、生徒の変化を本当に喜べるようになったことが本研究の最大の成果であると思う。

**今後の授業改善の課題**

英語を書くことへの抵抗感が強い(ある)生徒も含めて、書いて表現することを苦手とする生徒が多く、自分の考えを伝えられるまとまった量の英文を正確に書くまでには至っていない。どのように指導したらより意欲的に、達成感を持って活動に取り組めるようになるか、書く力が身につくかを探っていくことが大きな課題である。また、家庭学習を定着させるための効果的な課題の出し方を研究していく必要がある。